

巻頭言

アカデミシャンとエデュケーショニスト

日本作業療法教育研究会企画担当理事
群馬大学医学部保健学科作業療法学専攻
山口 昇

平成20年度より専門職大学院の1つとして法科大学院や会計大学院に続き「教職大学院」が開設されることになり、21校より設置申請が出されているとのことである。専門職大学院誕生の背景としては次のようなことが言われている。従来の大学院は専門分野の研究者養成と高度専門職業人養成との機能が不明瞭であり、どちらかといえば前者に偏った教育がなされ、実務レベルの教育は行われていなかった。しかし、国際化が進み、社会が複雑になるにつれて「高度で専門的な職業能力を持った実務家」が必要であるという時代の要請を受けて専門職大学院が誕生した。

教職大学院は、指導力と実践力・応用力を兼ね備えた「スクールリーダー」（現職教員を対象）および新しい学校づくりの有力な一員となる新人教員（学部卒業者を対象）の養成を目的とし、さらに学部の教職科目が並行履修できる長期在学コース（教員免許状未取得者を対象）も設定されるとのことである。

清水は教職観の対立として「アカデミシャン」と「エデュケーショニスト」があるとしている。前者は「教員にとって大切なのは学問的教養であり、教員養成のための特別の教育は不要」とするものであり、後者は「教員には教育そのものに関する学識、一般教養と教職教養の統合・統一的な教育が必要」とするものである。教職大学院は、その設置の経過から見ても後者であると言える。

作業療法を研究する多くの大学院（上記で言えば専門分野の研究者の養成としての機能であり、研究分野は各自が専門とする作業療法領域）ができ、学位を取得した作業療法士が増えてきている。また、他の領域と同様、大学で作業療法教育に携わろうとすれば学位を有していることが求められる。ここで、学位を有していれば（あるいは臨床経験があれば）作業療法教育が行えるとするのは「アカデミシャン」の立場に立つものと言える。もちろん、作業療法教育に携わっている作業療法士で、そのように考えている人は皆無だろう。

作業療法教育においても、学生の多様化や志望動機が明確でない学生の入学、学生の幼児化（？）が言われ、対応に苦慮していると聞く機会が増えた。また一方で、色々な教育技法も紹介されるようになり、それらについても学ばなければならないと心が焦る。こういう時に、いやこういう時だからこそ、教育の基礎・基本を学んだ上で作業療法教育にあたる必要がある、上記で言う「作業療法教育のエデュケーショニスト」が必要であると考え、その手始めとして本研究会で昨年度「カリキュラムデザインとシラバス作成」のワークショップを企画した。参加して頂いた会員の方はどのように評価され、役立っているだろうか？ その後を当研究会学術集会で発表して頂ければ幸いである。

作業療法教育の「教職大学院」の実現可能性はほとんどないだろうが、個人として「エデュケーショニスト」マインドを持ち、研鑽を続ける必要があると考えている。また、専門職団体として「エデュケーショニスト」を育てるシステムを整備する必要があると感じている。教育は作業療法（士）の質の向上のための原点であり、専門職としての発展につながると考えるからである。

清水 潔：教職大学院制度の課題と展望。教職課程10月号別冊，p4-5，2007。